●古今の英知を凝縮した中医疼痛診療学の集大成！

痛みの中医診療学

監　修：宮田　健（熊本大学薬学部教授）
編著者：趙　基恩・上妻　四郎
体　裁：Ｂ５判　並製　450頁　定価：本体 6,000 円＋税（送料 315円）

●中医学をマスターするのに適した臨床入門書
●臨床と直結した実用性の高い中医学書

本書の監修者である熊本大学薬学部教授・宮田　健先生は，「生薬の現代薬科学的評価による薬効の紹介や，現代医学の診断に基づく，患者の個人差，特殊性を重視した治療原理が示されている点は，各処方の効能に科学的根拠を与えるとともに，適応性を広げ，使用性を高めるもので，本書の価値を更に高めている。」と，薬学の立場から本書を絶賛している。

「痛み」は人体の警告反応であり，診断においては疾病・障害の部位，程度，原因を示す指標である。「苦痛」の最たるものが「痛み」であり，「痛み」を取り除くことが，古来，医療の原点であった。本書は，その「痛み」に関する中医学の英知を総合した一大臨床医学書である。中医学において，痛みの診療体系がこのように整然と体系的に形成されたことは，大きな驚きといえよう。

痛みの現代医学的研究は飛躍的に発展を遂げているが，麻酔剤・鎮痛剤による副作用問題，薬物への依存性の問題，難治性の痛みの存在，神経ブロックによる侵襲性の問題など，未解決の問題も多い。今，これを補う新しい理論と方法論の提示として，本書の登場は極めて有意義である。

本書は，総論部分では，痛みの研究の源流，病因病機，詳細な「診察法」，八綱弁証・病因弁証・臓腑弁証にもとづく「診断法」，針灸や推拿を含む多様な「治療方法」，鎮痛作用をもつ「中薬」の作用の考察など，全面的で詳細かつ多彩な内容を整然とまとめている。

疾患別の各論では，疾患の「概説」「分型論治」「経験秘方」「臨床証候と漢方エキス製剤の対応表」を示す。ついで，日本漢方の経験も「コメント」の形で簡潔にまとめて紹介している。痛みに関する東洋医学の智恵をほぼ網羅した大著である。

ご注文は　FAX専用フリーダイヤルで　今すぐにFAX 0120－727－060

〒272 千葉県市川市宮久保3－1－5
東洋学術出版社
電　話（047）371－8337
ＦＡＸ 0120－727－060

監修の辞

臨床上最も頻度の高い訴えの１つである「痛み」は，本来生体のもつ警告反応としての役割を果たしており，診断に際し疾病，障害の部位，程度，原因を知るための指標となる。反面，過剰で持続的な「痛み」は患者にとっては耐え難い「苦しみ」で，冷汗や血圧上昇，逆にショックなど自律神経系の反応とともに，不安，恐怖，不快などの原始的な情動を引き起こし，種々の身体的，精神的障害をもたらす。「苦痛」というが，「苦しみ」の最たるものが「痛み」である。医療の原点は「抜苦与楽」であり，「痛み」の除去は臨床治療上，極めて重要な課題となる。

西洋医学においても，鎮痛の目的で用いられる医薬品は多岐にわたり，中枢性（麻薬性，非麻薬性）鎮痛薬，解熱鎮痛薬・抗炎症薬はもとより，全身麻酔薬，鎮静薬，神経遮断薬，局所麻酔薬，鎮痙薬，冠状動脈拡張薬などもこの範疇に入る。これらの西洋医薬品はいずれも不可欠のものであり，病因が明らかにされている場合には治療効果を得ることができる。しかし，複数の要因によって起こる「痛み」や，起因（責任病巣）が明らかでない「痛み」に対しては十分な治療効果が得られないことが多く，また，患者側の生物学的条件（ホスト要因）で適応できないケースもしばしばみられる。後者の例としては消化管潰瘍患者への消炎鎮痛薬の継続的な投与などが挙げられる。

これに対し，中医薬・漢方医薬は複合薬として処方され，生体における生命現象全体のひずみ（生体恒常性ーホメオスターシスーの異常）を修復するという基本戦略をとっているため，上に述べたようなケースにおいても効果を期待でき適応が可能である。

「痛み」についての恒常性維持機構として，疼痛の発生に対してはそれを抑制するために生体内鎮痛システムが働く。脳内モルヒネと呼ばれるオピオイドペプチドが分泌されて痛みを緩和するが，附子はオピオイドペプチドの１つであるダイノルフィンの分泌を促進する。また，沢瀉や麦門冬は生体内発痛物質や痛覚情報伝達物質であるブラディキニンやサブスタンスＰに対する制御作用を有している。

従来，中医薬・漢方医薬による必ずしも疾病の原因を問わない非特異治療という特徴が，特定の病因を明らかにしてそれを除去するという考えに立脚している現代医学には受け入れ難いという側面をなしていた感じがあるが，現在では上記のように生薬のみならず方剤についても，動物実験で疼痛に対する制御作用とその機序が解明されてきている。これに加え，中薬・漢方薬ならではの多種生薬成分がもたらす血小板凝集抑制などによる血液循環の改善や炎症の抑制など，多岐にわたる病態改善を基にした［疼痛制御システム全体の再構築］が，苦痛の除去という医療本来の目的を達成するのに大きく貢献していることは疑う余地がない。

中医学・漢方医学の大家であるとともに，熊本大学医学部やカナダのマッギル大学神経研究所で西洋医学を修められ神経筋肉病理学，病態生化学領域で優れた研究業績を挙げておられる趙基恩教授と，上妻四郎博士の労作である「痛みの中医診療学」は，中医学における診察法，診断法，治療法についての豊富な知識と経験を基に，日本漢方医学，西洋医学的解釈も加えながら「痛み」「苦痛」の本質について余すところなく説き尽くし，その治療法をほぼ完全に網羅して紹介した他に類を見ない専門書である。

特に，生薬の現代薬科学的評価による薬効の紹介や，現代医学の診断に基づく，患者の個人差，特殊性を重視した治療原理が示されている点は各処方の効能に科学的根拠を与えるとともに，適応性を広げ，使用性を高めるもので，本書の価値を更に高めている。このような優れて有益な専門書を世に出して下さった趙教授と上妻博士に心から敬意と感謝の意を表するものである。

熊本大学薬学部教授　宮田　健

目次の一部

総　論

第１章　序　論

第１節　痛みの中医診療の沿革

第２節　痛みの病因と病源

経脈攣縮　血脈虚渋
気血不暢　陰陽失調
昇降失調

第３節　痛みの中医分類

病因による痛みの分類
痛みの病位による分類
痛みの特徴による分類

第２章　痛みの中医診察法

第１節　望　診

精神状態の観察
皮膚の色調を観察する
形態と姿態を観察する
舌体と舌苔の観察

第２節　聞　診

声や音を聞く
臭いを嗅ぐ

第３節　問　診

痛みの部位を問う
痛みの誘因を問う
痛みの病歴を問う
痛みの特徴を問う
疼痛の時間を問う
痛みの兼証を問う

第４節　切　診

第３章　痛みの中医診断法

第１節　痛みの八綱弁証

表裏弁証　寒熱弁証
虚実弁証　陰陽の弁証

第２節　痛みの病因弁証

六淫　七情　飲食，労倦
外傷　痰飲　瘀血

第３節　痛みの臓腑弁証

第４章　痛みの中医治療法

第１節　痛みの治療ポイント

主証を把握する
痛みを止める
痛みの性質を把握する
病変の部位を把握する
病気の段階性を把握する

第２節　痛みの中医治療法

中薬治療　針灸療法
推拿療法　熏洗療法
外敷療法　熱熨療法
敷貼療法　吸角療法

第３節　常用止痛生薬の薬理作用

理気止痛の生薬　活血止痛の生薬
温裏止痛の生薬　清熱止痛の生薬
去湿止痛の生薬　去痰止痛の生薬
瀉下止痛の生薬　消導止痛の生薬
駆虫止痛の生薬　補虚止痛の生薬
平肝止痛の生薬　解表止痛の生薬

各　論

第１章　頭部と顔面部の痛み

第１節　頭　痛
第２節　頭部外傷後神経症
第３節　脳腫瘍
第４節　蓄膿症
第５節　三叉神経痛
第６節　耳　痛
第７節　流行性耳下腺炎
第８節　咽喉痛
第９節　口内炎
第10節　歯　痛

第２章　頸項部と肩周辺部の痛み

第１節　変形性頸椎症
第２節　肩関節周囲炎
第３節　肩凝り
第４節　寝ちがえ

第３章　胸脇部の痛み

第１節　肺　炎
第２節　胸膜炎
第３節　狭心症
第４節　ウイルス性心筋炎
第５節　肋間神経痛
第６節　帯状疱疹
第７節　ウイルス性肝炎
第８節　胆嚢炎
第９節　胆石症

第４章　腹部の痛み

第１節　慢性胃炎
第２節　胃十二指腸潰瘍
第３節　胃下垂
第４節　慢性膵炎
第５節　潰瘍性大腸炎
第６節　過敏性大腸症候群
第７節　アレルギー性紫斑病
第８節　月経痛（月経困難症）

第５章　腰部の痛み

第１節　急性腰痛症
第２節　慢性腰痛症
第３節　腰部椎間板ヘルニア
第４節　変形性腰椎症
第５節　腎と尿管結石
第６節　腎盂腎炎

第６章　会陰部の痛み

第１節　下部尿路感染症
第２節　前立腺炎
第３節　前立腺肥大症
第４節　ベーチェット病
第５節　痔
第６節　裂　肛

第７章　四肢・関節の痛み

第１節　変形性膝関節症
第２節　慢性関節リウマチ
第３節　痛風性関節炎
第４節　坐骨神経痛
第５節　多発性神経炎
第６節　皮膚筋炎・多発性筋炎
第７節　レイノー症候群
第８節　閉塞性血栓血管炎
第９節　血栓性静脈炎
第10節　全身性進行性硬化症

第８章　癌の痛み

第１節　肺　癌
第２節　食道癌
第３節　胃　癌
第４節　肝　癌
第５節　膵臓癌
第６節　大腸癌
第７節　膀胱癌
第８節　腎細胞癌
第９節　骨肉腫